

早淵川観察会 秋 (H19.11.)



早淵川観察会 春 (H20.5)



実践内容：・早淵川の生物相調査： 季節毎に早淵川を歩き見られた生物を記録し学校便りなどを通して紹介した。また、観察会の折にはメダカ、スミウキゴリなど早淵川を代表する魚類、カワセミ、などカルガモなど鳥類を記録した。

・早淵川流域をイメージした流水池の整備： 学校の既存の池に改修を加え、早淵川に自生する植物等を移植した。その中のセリに、キアゲハが産卵し、5 齢幼虫になるまでを観察した。また、早淵川で採集したメダカ、モツゴ、スミウキゴリを入れた。夏の間メダカは繁殖し、群泳が見られるようになった。また、シオカラトンボ、ショウジョウトンボ、ギンヤンマなどのトンボが飛来し産卵するのを確認している。

・早淵川流域水族館整備： 校内のフリースペースに水族館をつくり、魚類などを展示しいつでも生物に親しむことができるようにした。児童の飼育委員会が中心となって魚たちの世話をを行っている。モツゴ、メダカ、ドジョウ、フナ、テナガエビ、スミウキゴリ、モツゴなどは1 種ごとに分け30cm水槽で飼育している。登校時や休み時間にはいろいろな学年の児童が魚を見たり、えさやりに訪れたりしている。

・観察会の実施

PTA 家庭教育学級で地域の公園愛護会の方やNPOの協力を得て秋、春2回の早淵川の観察会を実施した。それぞれ、90名、250名を超える参加者があった。

第1回目、昨秋11月の観察会では、多少肌寒さがあったものの、親水広場のわんどに入りメダカ、スジエビ、スミウキゴリなどを観察した。是非2回目も実施してほしいなどの声が寄せられた。

1回目の反響をうけ、第2回目は5月に実施することになった。この観察会の折には投網などにより採集を行い現地に作られた水槽展示により、鮮やかな婚姻色の出ているオイカワを始め、魚類やクサガメ、アカミミガメなど多様な生物の観察ができた。草地の管理をしている愛護会の方々には、在来の植物とセイタカアワダチソウやブタクサなどの外来種についての説明を受け、機械ではなく人の手の力で1本ずつ外来植物を抜く経験ができ、移入種と在来種の関係について考えるきっかけとなったようである。

■実践成果：

・子どものふるさとづくり： 地域の自然環境で遊び、学ぶ経験を通し心のよりどころとしてのふるさとを実感できるようになってきた。観察会に参加したほとんどの子どもたちは川が大好きになったようである。今回の研究をきっかけに、理科、社会、総合的な学習の時間など、授業でも早淵川を取り上げることが増えてきた。今後、さらに川に親しむ経験を重ねることが期待できる。

・環境学習の推進： 身近な自然環境に親しむことにより、環境に関心を持ち地域環境をよりよくしていこうとするようになってきた。理科や総合的な学習の時間に早淵川など地域の自然環境を生かした内容を次のように、取り上げるようになってきた。今後、さらに学習の場面で早淵川を中心とした地域の自然環境を取り上げることが期待できる。

・親子の心のふれあい： 親子で身近な自然の楽しさをあじわう活動を通し、親子が心を通い合わせる場面を設けることができる。この2回の観察会の反響は大変大きかった。ほとんどの保護者は、ごく身近な生活の場を流れる早淵川に立ち上がったことがなく、採集や観察の仕方をご存じないようだった。そのため、予想していたよりも、はるかに水質がよく多様な生物の賑わいのある早淵川に驚かれている様子だった。また、親子での参加であったため、親子のふれあいや家族間の交流の場ともなるなど、主催側にも予想外の効果が見られた。

■実践ポイント： 今回の研究では、当初から予定していたように、PTA の協力があって初めて実行することが出来た。親子で参加することで水辺やそこに住む生物など環境の話題を仲立ちに、親子の心のふれあいが出来た。また、こどもだけでなく保護者にとっても身近な自然の豊かさを実感し、子どもたちのために地域をよりよい環境にしていこうとする機運が高まっている。

また、学校教職員もこの活動に参加した。今まで早淵川など地域の自然に関心をもっていなかった職員も、実際の川で活動することにより、川のおもしろさに目覚め、積極的に授業の中に生かすようになってきている。